２０２４．２．２５．主日礼拝説教

聖書： マタイによる福音書9章14～17節

『 新しいぶどう酒 』

「断食についての問答」という小標題からも分かる通り、本日の箇所は問答という言葉に表されるように対立関係がベースになっています。この9章は論争物語から始まりましたが、ここではその三つ目の論争が描き出されます。これまではファリサイ派や律法学者が対象でしたが、ここではヨハネの弟子たちがその対象となります。洗礼者ヨハネの死後も彼の弟子たちは教団を維持しておりましたので、ある意味においては初代教会の競合相手として対立関係にあったと思われます。ちょうどそんな関係がこの伝承の形成に反映されているようです。

さて、物語はヨハネの弟子たちからイエスの弟子たち(教会)に対して仕掛けられます。内容は断食です。当時のユダヤ社会では、断食とは自らの罪を悔いる心の表れとして重視されていました。それは旧約の古い規程(レビ16;29以下等)に由来するもので、一定期間の飲食や入浴の禁止が実施されたようです。その後、断食は神の前でのへりくだりであり、贖罪的効果を持つと考えられるようになり、イエスの時代にはすっかり慣習化していました。ファリサイ派にいたっては年5回の断食日のほか、毎週月曜と木曜に行っていたくらいです(ルカ18;12)。一つの行為に埋没する者は、同じ行為を実践しない者を敵対視します。なぜなら行為の積み重ねは自らを正義として自己昇華させてしまうからです。

ところが、イエスの行為は彼らから見るととんでもなくひどい有り様に映ったのです。なにせ断食は守らないばかりか、いかがわしい者とさえ食事を共にするし、「大食漢で大酒飲み」(マタイ11;19)、おまけに主の祈りには「今日のパン」まで祈願するという、へりくだらないばかりかあつかましいにも程があるならず者の集団に思えたのだと考えられます。

イエスはこの非難に対し、三つのたとえを話します。花婿の時(15)・布のつぎ当て(16)・新しいぶどう酒(17)です。15節の花婿はもちろんイエスを指す言葉であり、彼の死後、教会が再び断食を始めていたという事情が記されます(使徒13;3)。16、17節では古いものと新しいものの対比です。前者はユダヤ教、後者はイエスの福音です。しかし、マタイは古いものを完全否定して自らを正義と名乗るような行為には走りませんでした。彼は最期の17節で「そうすれば、両方とも長もちする」というオリジナルの言葉を付加して、ユダヤ教の全面廃棄ではなく、その再生とそれによるキリスト教との共存関係を期待したのでしょう。

わたしたちはお互いが何事かを確信し、いろんな行為や主張を行ってはいますが、はたしてそれらがどれだけの妥当性を持っているのやら、考えてみればいささか心もとないことかと思います。けれども、生きることを止めるわけにもいかず、やっぱり間違いだらけのままとにかくわたしたちは生きているわけです。情けないことに結局は何一つ分かっていないのでしょう。

しかし、ひとつだけ言える確かなことがあります。分からないなりにも思いやり深く生きていると、人生というものはなんとか恰好がついてくるものだということです。それは愛がわたしたちのすべての間違いを覆ってくれるからでしょう。

マタイの記す「新しいぶどう酒」とはこのイエスの愛のうちに入れられるべきものなのでしょう。